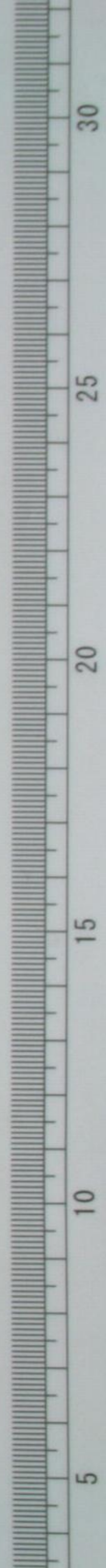


自叙傳資料

大正七年四月中一錄

特別
14
1919
754



先山川將軍を尊ぶるは、山城城(名)を治むる
 ことありあり、此、物申と後りある城、何人、
 一、此、折、余の名を尊ぶ、あの人、市、此、性、不、似、
 合、此、より、大、勢、に、通、じ、治、を、
 比、と、ま、す、こ、と、を、直、接、山、川、に、
 可、し、此、こ、と、を、言、い、人、を、馬、鹿、河、
 比、類、を、治、む、事、多、家、の、子、弟、の、多、く、
 一、自、人、も、若、し、裕、福、を、言、う、
 け、裕、福、を、生、活、を、続、續、し、
 通、の、例、と、漏、れ、が、統、務、者、
 日、も、も、も、冷、方、無、つ、た、
 然、る、自、分、

ハ、幼少の頃、家道は衰へず、
 一、二、育、び、
 家道衰へ、
 つ、比、保、し、
 潤、る、
 意、の、
 び、あ、つ、
 の、と、
 修、業、
 或、
 の、つ、
 マ、サ、カ、
 人

一此も亦おぬがとも云ひぬが、確たる温飽の
べし無つれ

一自分の家外何れ破産をせざるものたるに就ては
家史を讀むべき大略を述ぶるが、大体先考
の幼弱の時に父母の遺言を承継せしむる
其後棄彼せしめて先考の家長とせしむる家
産を料理せしむるは、十年の老を過ぎたるに
新の革命が起つて家産を守ることが困難
となり公許のところに買換が一時に山高まり
るが破産の原因となりて之を、つまらぬ
時ハ保守の力動もするべきを定むれば位か
も、義氣の目つ道おぬであつても勢ひ

を破らざるを得ぬ、家史におゆの事、後々あ
つらんを傍印する、二節候を要する事、
ら成辰の乱後下余の宅を家史に提供
し、二書あり引き、此の條を叙し、
其の要本、引き、母方の丹其の令家の宅
を借宅し、此の條を狭き、此の條を、
に、此の條外一二の事、を建増し、
家史のハ、此の條に、此の條を、
而倒る起つ、此の條を、
福り養賢、此の條を、
爰も亦、此の條を、
如、此の條を、

もし放擲して夏は切つて暮しの流路を
開けしむるものもあればあるが三
自分が政治の志のある以上御世の人として
一指ひもよこさぬに困るを願ふて家業
の救済も宜い然るも正直なる(キ)何人
も迷惑をうける事と奇麗に債務を
論ずるにせざる誰れもの懐然も買つた
他りも何れも無一物さうして引つた
四自分より前途政治の生活をするある家の
債務に累のらひせんも又自分の行動に家
の累を及ぼして困ることをみづかき後
悔を主張して戸籍面への^①負債とさうして

の事と自分の今一年の大半の卒業の出来の
を實際家とさうして世にまつて士の特長を
どの印の之が^②責任にさうして考へて退き
しに

一 右の如く自分家の自分の生時時代は早
く没後したる^③論議も自分を扶助し
^④腕一本脛一本むいどこまむもさうして
往つたさうして若くも偉らうしてさうか
種克己揚子の心で起つたか
悲しく今の自分も十倍もさうして上
も偉らうしてさうして相違なくさうして然
るも思ふもさうして人を非難する換ふ市

自分：私し扶助（世へんん）親族の扶助。亭
 うまきるべきは、（世へんん）叔父日新の氏も
 後うまきる家（世へんん）自分
 扶助を受けけ（世へんん）決して学あつてこそ
 老ののこのかハ無つた。えんり方あり。自分の
 父母の窮乏と急うん政治生活も継続す
 ること、出来、（世へんん）終生忘れ難い
 思ふがあるが、自分も腐みん此の思ふの
 為め、自分の依頼心より増長し一身の完
 をあつてこそ、（世へんん）勿論非ハ自分
 への思ふも、思人を怨む譯ハ無いこと
 ハ言ふまでも無い

一 自分の少年の頃、おれは親戚、（世へんん）重んずる
 こと、其評ハ亭の家と存んぬ叔父も力あるの
 鞭撻指導す。より勤勉ハあり、学力もあつた
 譯ハ無いが、勤勉の結果、年々累ねたる
 學問、進んぬ家道、う衰ひうつたは、（世へんん）
 親戚も自然、自分、（世へんん）此子ハと
 リを免る用おろし、いと云ふ持ら、（世へんん）
 兄へ、自分、おれ、弘業館、（世へんん）
 也豊城先生、（世へんん）西
 条、引廻し、（世へんん）分家
 の叔父、ある人の家、（世へんん）二
 ミ、（世へんん）叔父、（世へんん）

うふいとの先はお前を存せぬと居るといふ
そのとき喜んだに又其後漢字をなぬし江の
学校に英字をなすこと居る頃より成績が
良うなりしを母の親戚の栗林重三郎がひ
どく頼もしいがらん東京に出て親戚の進令
氏に寄附ししより英語学校に入るも進令
開成学校に入つた頃より進令氏七自分の子
力の優等なることを認めし進令氏開成学校
の入る試験に合格し進令氏進令氏一級を
合格して冒險向の自來試験をなすけし
幸ふ及弟一級を自來と改命せられた
ことである

一併し自分に終始同歩を志せし終生忘るの
うする扶助を志せし恩人の知人の叔父に
ある、和名の叔父の正父であるといふ
ハ島の父は自分も義父であるといふが
少年の頃親戚の進令氏に居るが、あつて
行つて居ると親戚の叔父の親戚の
兄の進令氏と云ふ人を信じて居るに、此の
進令氏と云ふ人の自分より七年前か八年前か
後か人であつたか、自一君の弟として自分の扶
つて居るに、あつたか、あつたか、あつたか、
此の七年前の進令氏に對して、あつたか、
を母稱揚せん居るに、あつたか、此の人

傲のふしを云々、自念切つて報愧し
ともあつた、叔父君は家家の宗領で自念
對し一層口内もあつた、新河を後日
入る頃、その事を思つて、早急をせよし
て大志を退りて後、数年間、世をなす
を思つて、これのふり、父母を奉じて一家
をまゐる月、款もあつた、終るに、廿五の歳
松河、家宅を購ひて、無事、えん、又不時
の費用をも、少くも、せよ、方、田の
少く、在り、中、一、つ、入、獄、中、の、母、
家、下、つ、あ、る、の、補、給、を、請、ひ、
父母、
計、の、窮、乏、を、告、げ、て、
十二

○の生計に窮乏を感せしむることを得ず、和ら
家父子の自念、亦に自分の家とあつた、口内、
り、世、の、例、の、無、い、任、事、の、あ、る、叔、父、の、念、
自念を飽す、後、り、ま、い、主、流、の、世、に、ま、
窮乏を物けさせ、一念、こ、出、た、こ、と、
自念、の、窮、乏、を、
列、ん、
ひ、あ、る、

一 自念が、政治生活の歩を、進め、
を、執、り、名、聲、漸、や、く、
或る人、自分の、
復舊を、
復舊を、
復舊を、

此病後数年ハ主治醫南の言つ比こども連も身体
ハ活動して居るやうな、亦つらく有へて見るも自
分のことき、清濁併せ吞むことの出来ぬ性格
のものが窮極政治に成切するハ覺來する感
をもえた、いつと下働きする努力し比所で養の
河原の忠誠第一般むん丈の切ら剛家のあ
るむも、いさゝかも實り出束ゆる丈の努
力を教育の中目せば、努力丈の——甲斐
があると思し比の如、政治を廢めて教育に
身を投じ比所以である。

一 自分、早稲田大生、關係し比のそ其前身東京の
學校の創立にさかあつた、一時ハ教鞭を執つ比こ

七五の長、長く幹事ハの職に居る比こども、併し
此頃の學校も、振り出す自分も、浮氣むも、政治
ハ脚を投じ比るうに、餘り成績の足るべきこと
ハ無つた、自分か此を校に努力して相苗の成績も
挙げ比ると、病後である、先づ同も彼の任を
らぬので、追々要職に立ち、名譽を助けた大學生
職とするものも、其金の募集集や一般に
力を注いだ、今が浮氣の治法むるうに、
着る、実績の見るべきことあり、年の切心
もあつた、今も政治断念の結果、浮氣の
氣、轉して沈着とするため、
一 病後十年の間、醫術を、嚴守して、煙草も酒

も酒に比、これら自分の健康に大なる効果がある
つ比のむさく酒梅も縁遠くつ比を以て無益
の浪費も漸やく減つた、嘗て酒を嗜し比お産
と云いんとして改法を成し比お産がある、改法は
運動も日無駄金の要するもの無い、設令い
者後酒を嗜し比も尚改法運動を継続して
その比も不相当な浪費も果を為し比も相
違ふもの、併し自分の境遇ハ、不如意欲心家
計七元分はあつたが一方に節する所があつた
敢て借銭する程の事も無くも満ん比
一 自分が酒も飲酒を以て照り登る、酒も飲味
を感し比結果として種々の出版行を以て興る

ことになりつた、酒も刊行を起し比も早稲
の出版部の衝にあることになりつた、又文協
会の任を以て興ることになりつた、比も是
等々好力カーを相成の成績を挙げることの
出来比も皆為後のことになりつた、漸やく落
付いた、~~事~~比も是れに就し比換に
なりつた

一 自分ハ少壯の頃酒がなご味乐的娛樂を以
てなごつた、然るに十年酒を嗜し比も是れを
病を感することあり、酒の味も代
はるこの是れ必要とありつた、比も是れ
味を覚むることになりつた、其の委曲ハ自

叙傳の執味方面と題する項にもそのことあり
こゝに略するが書畫や骨董やその他
趣味の起つたのも、又いろいろの物を蒐集し
それのち皆うろ病後のことかあつた家計に
のり餘地が有つた結果である

一 自分の大隈侯と識るべき代りかあるが、侯
に頻りに親炙し侯と旅行を共にしたのち
早稲田大隈の往來、多摩野生にたまり候
ハテの遊境にまゐり其遊にまゐり代り
存つた社倉敷育と努力さん、早稲田
田大隈のゆゑに一方よりぬ力を致さんた、而
て常々其の左右に侍し形影お離れふこと

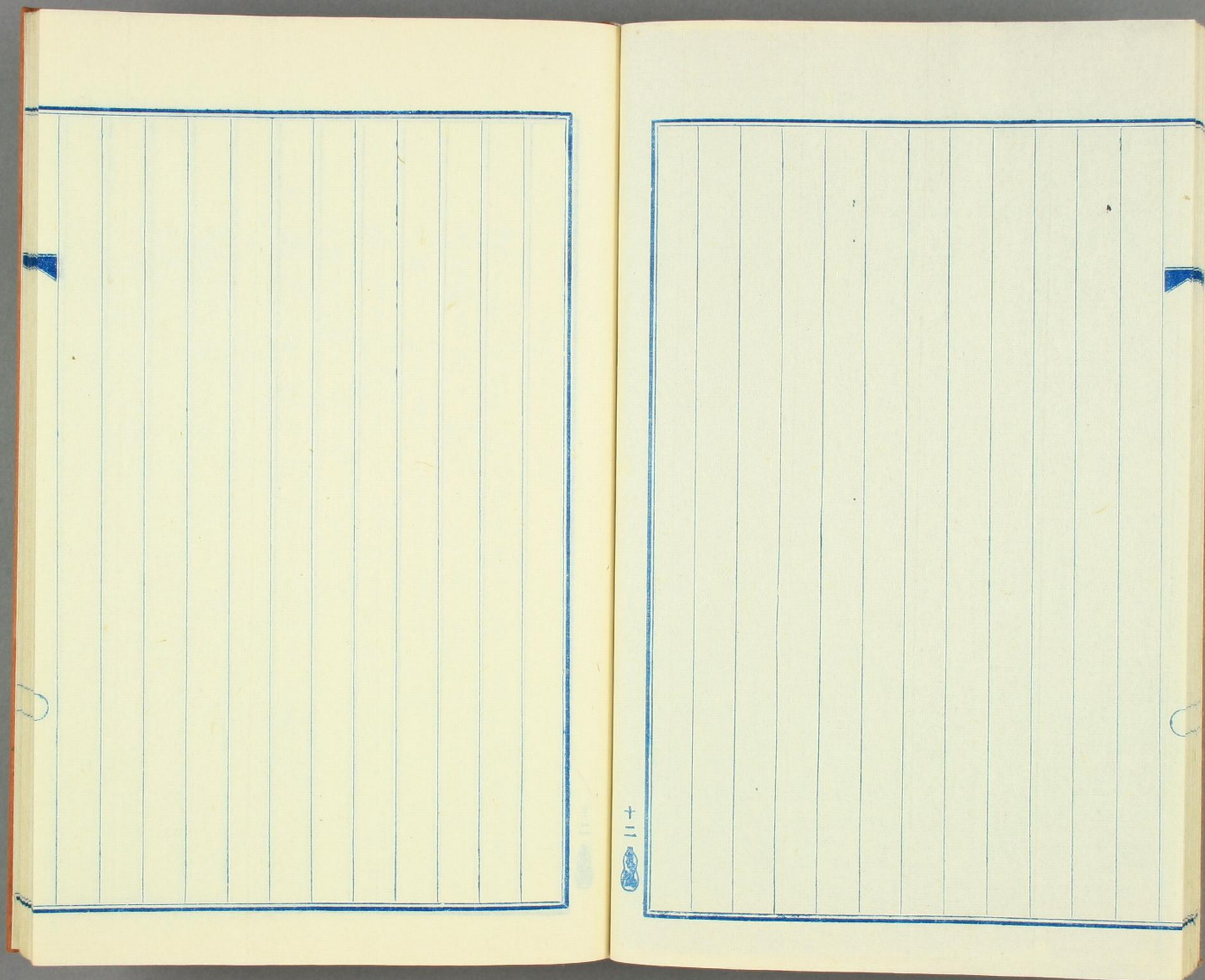
き趣をとりし是つたのち自分か、侯の偉大の
人格と雄^軍の氣魄と剛断と、董油を受
け一種偉大なひ難い氣格と品性●を養
ふことの出来たるも、自分の政沈期、格を
定まり病後政沈を癒して、その後、
い

一 目今、全体敗毒怨に極め、淡泊の性、
をを溜めたり、敗毒が欲しいをを、
此時代、
うつた、
て見ると、
つたが、

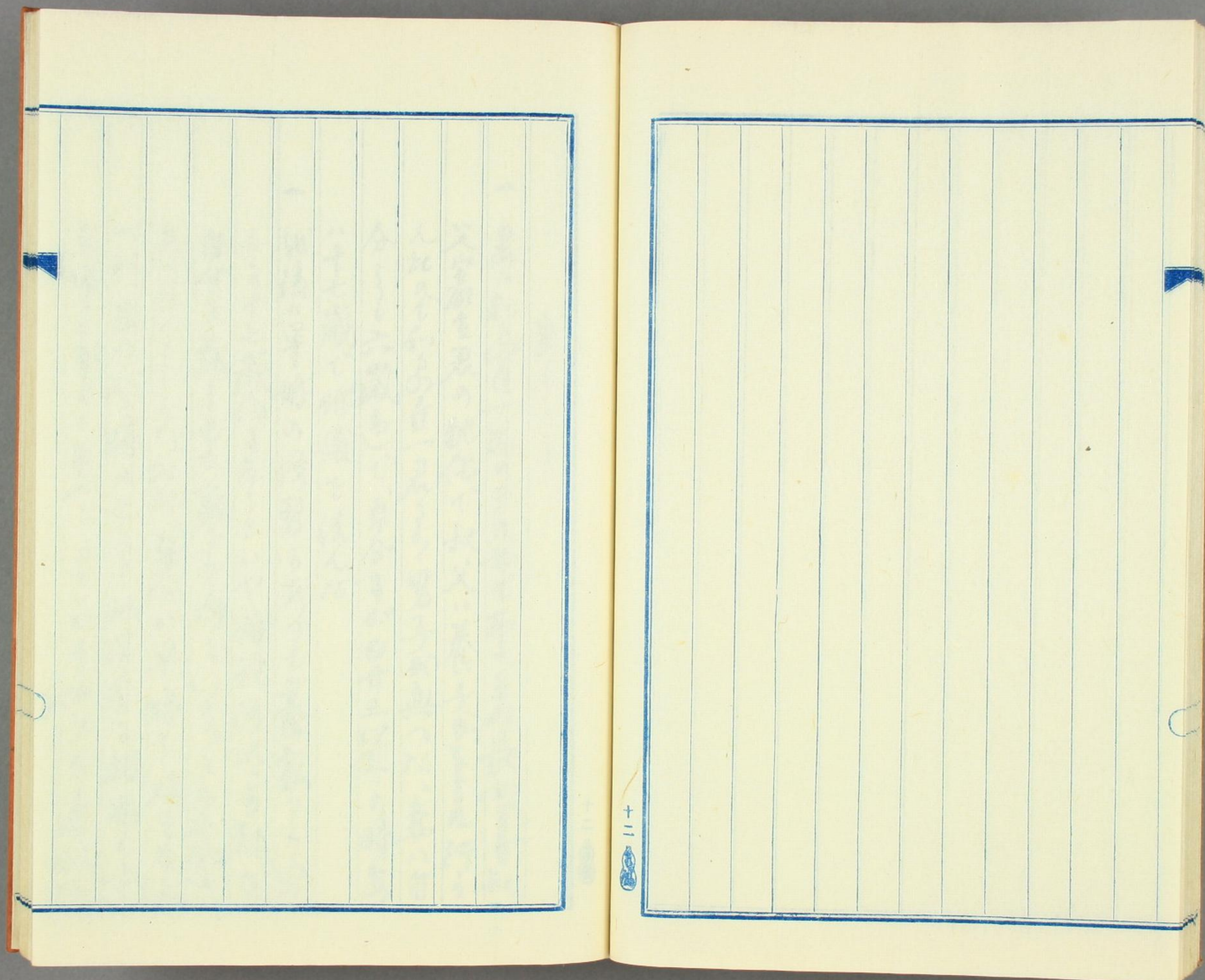
熟する薪の起るぬ、而る或許次貝寺の出
来比りり偶然と云りんらう、寧ろ
の力と云ふべきか、
初妻の物類大の土地を買入ん比のり、
くの如く、
後うと小屋を建てる、三千坪ほどの土地
にゆかの住を造りて本宅も無い頃別
荘の方へ先づ出来、
五月現在の母車五軒所の土地家を賤
ふと二重を新築し、此の新居を賤
ことなるつ比の七内子、
三萬圓也、

窮し、
いと長上、
多く年来、
世業の大半、
米、
什が三、
外の書、
来比り、
する、
くの修、
●

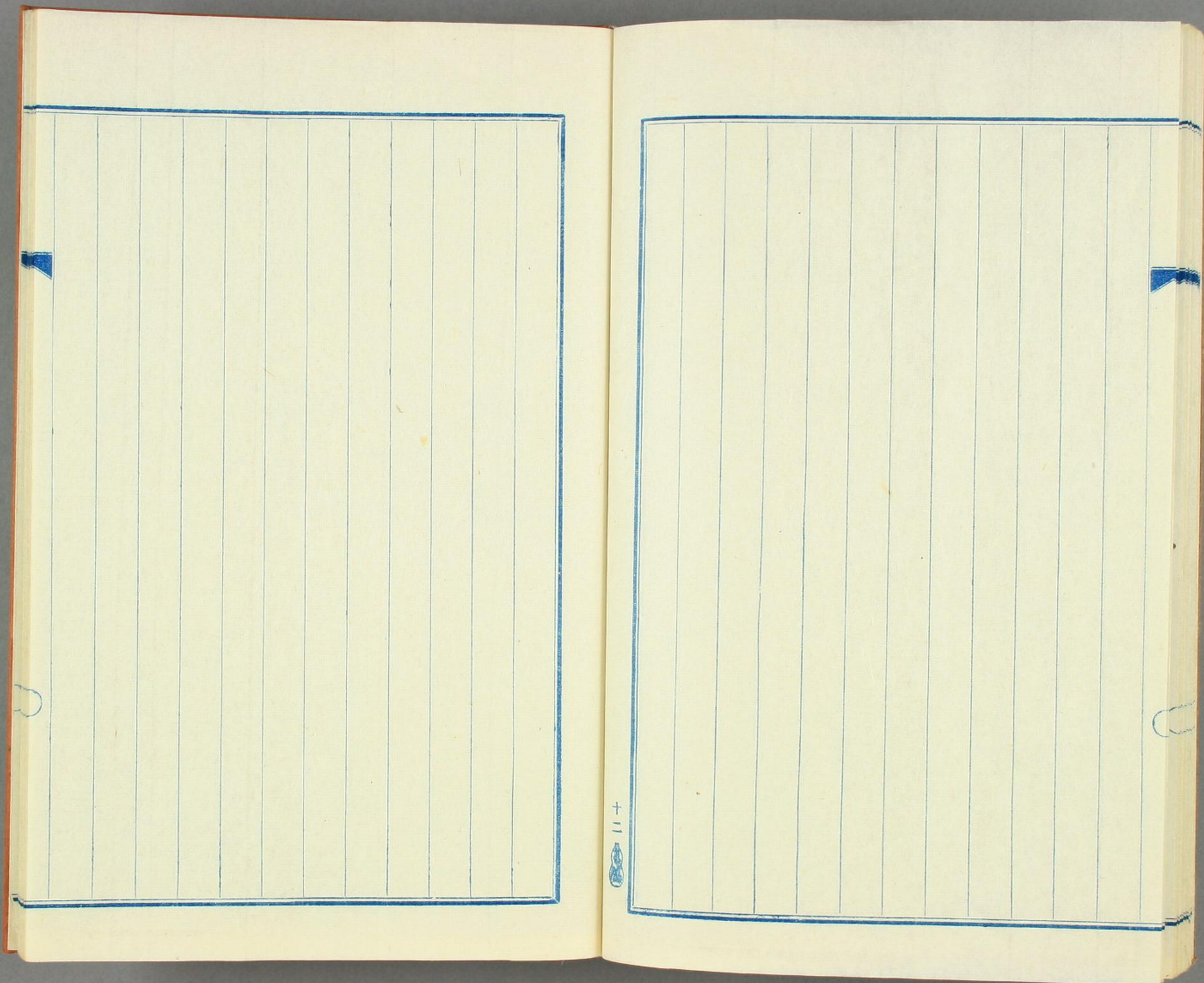
四月十号録



11



十二



以下
14丁
白紙

家祖との関係は、**①**進んで話すべき事柄、
柄を思ふ。

吾家の始祖に就ては、**②**記録の存否、
一として居るものありあざりし、**③**日記の存否、
おのの考よりんは、父祖の碑文、**④**いくらに
歸せんやある事、**⑤**先考が記憶せん居る
こと、**⑥**位々く**⑦**材料の無い、當りての如き
十六年中一月中、**⑧**書業にりし、**⑨**社の雑記
、**⑩**市況家のる、**⑪**歴を載せしむると、**⑫**需めえ
今の所人ともうた、**⑬**紙目切備、**⑭**去る、**⑮**筆を
えらも、**⑯**自分の切る、**⑰**限るを考へ、**⑱**二三編
に、**⑲**流り揚、**⑳**動やし、**㉑**えん、**㉒**ことある、**㉓**えん。

市井家の母唯一の家史とも謂ふべきことあり
 其地より家系も自らの家もえんが以
 上のあり無二の旋縁と目し候ること
 と申し候ことあるが、皆まことと源流
 たる、自叙傳より必要家の事一々ある
 多く、賦壽に聞する勲家のことと、執
 業あるの神々に候る今ハおきしこと
 のこと勿論もあるが今ハ候るま切板を
 部を収め、自叙傳を必す候ることを元捨
 前分裁せんことを元式する

